サンプル - パロットアンドラダー

シュガースイートセイクリッド

サンプル - パロットアンドラダー

サンプル - パロットアンドラダー

Ⅰ　どうして涙は熱いのか

七耀暦一二〇四年、十二月。

クロスベル市郊外上空、特殊作戦艇《メルカバ》にて――《クロスベル独立国》の強行立国以降、市街全域を覆っていた不可思議な障壁が消え、ようやく目処が立ったクロスベル市解放作戦を翌日に控えたその夜――艦橋にいたのは年端もいかない少年と少女だった。

二人とも全くの無言でそれぞれ席に据え付けられた端末に向き合い、キーボードに指を走らせていた。場の空気にピリついた緊張感の類はまるでなく、集中力を高めつつも余分な力は抜いてリラックスできているような、勝手知ったる者同士の間になんとなく横たわっている強固な信頼のような、そういう安定感に近いものがあった。

やがて、少女が手を止めて軽く息をつき、少年も椅子の背もたれにのけぞって伸び

サンプル - パロットアンドラダー

をした。艦橋と連絡通路をつなぐ扉が開いて「ティオ」と通路から入ってきた青年が少女を呼んだ。少女が振り向き、青年はそちらへ歩み寄っていった。少女は彼を「ロイドさん」と呼んだ。

「お疲れ様です。皆さんの様子を見て回っているんですか？」

「ああ。大事な作戦の前だし、少しでも手伝えることがあったらと思って」と、ロイドは頼もしそうな笑みを見せた。「ティオたちは何をやっているんだ？」

「明日の突入に向けてシステムの最終チェックをしているところです。わたしはロイドさんたちと一緒に船を降りていくつもりですが、通信ターミナルを押さえたあとのハッキングなどは、ヨナとフランさんにお任せする必要がありますから」

「そうか。ヨナのほうはどうだ？」

ヨナと呼ばれた少年は首を回して振り返ると、小生意気そうな笑みを漂わせた。

「ハッ、ボクを誰だと思ってんのさ。こっちは任されてやるから、そっちはせいぜい頑張って市内を引っ掻き回してくれよ？　リアルが混乱すれば、導力ネットからつけ込むスキも生まれてくるだろうし」

「ああ、お互いの役割をきっちりこなそう。……しかし、なんだか大変そうだな。俺

サンプル - パロットアンドラダー

はそういうのさっぱりだから、直接力になれなくて申し訳ないけど」
「ま、これに関しては単に人数いればいいってものでもないからな」
「ええ、それにもうすぐ終わりますし心配はいりません。ロイドさんはリーダーらしく、ドンと構えておいてくれれば十分かと」
「いやいや、こっちはこっちで明日の準備とか色々あるし……まあ、その調子ならここは任せてよさそうだな」
ティオが微笑んで頷くと、ロイドは安心したように笑みを見せた。
「君たちもしっかり休息をとっておいてくれよ」
「ええ、了解です」
返事を聞いてロイドはうなずき、踵を返した。ティオは首をかしげた。ロイドの足が彼の入ってきた扉ではなく、ヨナの席の方向へ向かっていた。
「ところで、ヨナ……今日は徹夜するつもりじゃないだろうな？」
「げっ、なんか飛び火してきた。ティオだけ心配してりゃいいのに……」
「そういうわけにもいかないだろ」
念を押すように肩まで掴まれたヨナの面倒くさそうな横顔が見えて、ティオは思わ

サンプル - パロットアンドラダー

ず声を漏らして笑ってしまった。二人が同時に振り向いたので、言い訳の代わりに小さく首を振る。

「わたしの分までしっかり釘を刺してあげてください」

「任せてくれ。さあヨナ、どうなんだ」

「い、いやー……ほら、準備はそろそろ終わるけど、ボクって夜型人間だしさ。下手に寝ちゃうより、徹夜明けのテンションのほうが調子いいかもしれないし……」

「あのなあ……明日は長丁場になるだろうし、徹夜なんてしたらもたないぞ？　もうすぐ終わりそうならなるべく早めに休んでくれ。絶対そのほうがいいからさ」

「へーへー、分かった分かった。適当なとこで切り上げて休むから、いちいちニラむなっつーの」

　辟易した様子でヨナは端末に向き直った。背を向けられたロイドは呆れながらティオに目配せし、ティオはうなずいて返した。あまりお人好しが過ぎるのも如何なものかとは思うのだが、共に《壁》に立ち向かう大事な仲間の一人としてヨナを放っておけないのはティオも同じだった。

「あ、ロイドさん……」

サンプル - パロットアンドラダー

呼ばれてロイドが振り返った。少し首をかしげて、口元は微笑んでいる。
「……いえ、なんでもないです。そちらもゆっくり休んでください」
ロイドは少し気掛かりそうな様子を見せたが、ティオが首を横に振ると、目元を緩めて「また明日な」と艦橋を後にした。彼の後ろ姿を覆い隠すように扉が閉まった。ティオは小さくため息を吐いた。
それから一時間も経たないうちに、ヨナが席を立った。彼が操作していた端末はスリープモードに切り替わっていた。
「終わりましたか」
「終わった。またアイツが見に来る前に仮眠とってくる、二時間くらい」
「どうぞ」
ティオは手元に視線を落としたまま言った。彼女の端末もスリープモードに移行中で、程なくしてディスプレイのバックライトがフッと消えた。それまで画面を埋め尽くしていた機械語の羅列の代わりに表面ガラスに映ったティオの手には書類のようなものがあった。ヨナが近づいて少し覗くと、柔らかな色合いの紙に誰かの手書きの文字が整然と並ぶ、ごく一般的な形式の手紙だった。

サンプル - パロットアンドラダー

「何それ」

クロスベル市内との通信回線が未だ遮断されたままという状況も踏まえ、見慣れない手紙を明日の作戦に関わる何らかの連絡かもしれないとヨナは思ったのだろう、とティオは推察した。興味本位にしては幾らか真剣なニュアンスを彼の眼差しに読み取れたからだ。ヨナのほうへ目を上げたティオは、そっと便箋を折り畳んで中身が見えないようにしたが、手紙の存在自体を隠そうという素振りではなかった。

「わたしの両親からの手紙です。こういう状況なので、特殊なルートを使ってアッバスさんが届けてくれて」

ヨナの返事は、へえ、とも、はあ、ともつかない曖昧なものだった。

「実家、レミフェリアだっけか」

「そうです。今は二人とも共和国のアルタイル市まで来ているみたいですが」

「ふうん」

まあ興味ないけど、とヨナは言外に言っていた。彼のそういった感覚、他人のプライベートにさして興味を示さない薄情なところをティオは気に入っていた――その代わりに導力ネットの世界では徹底的に漁られていることも承知している。システムエ

サンプル - パロットアンドラダー

ンジニアよりもハッカーのほうが性に合うらしい彼は、あくまでも自らの手で情報を探り集めることに達成感を得るのだろう。とは言え、ティオはヨナの手の内を知り尽くしているので、幾らでも対策の取りようはある――が、今は少しだけ当てが外れた気分だった。より端的に言うならば、今の彼に望んでいるのはティオに興味を示して能動的に話を聞くことだ。ヨナが次に口を開くより前にティオは続けた。

「どうやら二人とも、わたしに会いに来てくれたみたいで……手紙によると、国境の町まで来ていて、そこで足止めされているようです」

「それは……まあ、この状況じゃそうなるか」

《クロスベル独立国》は大陸横断鉄道と定期飛行船をストップさせており、物流と人の出入りも厳密に制限していた。平時ならば一国の独断でこのような暴挙が許されるはずもないが、大陸最強とも謳われるエレボニア帝国軍とカルバード共和国軍の部隊を壊滅させた圧倒的な《力》を盾に脅されては、他に異論を唱えられるものはいない。ティオは両親が『会いに来た』と言ったが、実際のところは『迎えに来た』のだと理解していた。クロスベルの状況は決して楽観視できるものではない。今は一方的に強硬姿勢を貫いているが、かつて宗主国であったエレボニア帝国とカルバード共和

サンプル - パロットアンドラダー

国の二大国とは完全に敵対し、いつまた攻め込まれるとも分からない一触即発の状況だ。そういう危険な場所に大事な娘を一人で置いておけない、と思うのが、親としては当然のことなのだろう。

「そういえば、アンタの実家の話って全然聞いたことなかったけど……わざわざ会いに来たってことは仲が悪いわけじゃないんだろ」

「そうだと思います」

「アルタイル市ならすぐ行ける距離だし、ちょっと行って顔見せてくれれば？」

「……返事は出しました。わたしが無事でいることは伝わっています」

ヨナは曖昧にうなずいた。さして興味がなさそうな様子は変わらないが、それで良いのか、と疑問をはらんでいる。ティオはそれを察しつつ、また自分の手元に視線を落とした。

ヨナの言う通りだ。両親はティオを心配して、危険を承知で会いに来てくれているのだ。極限状態の共和国を通って国境付近まで来るのも楽な道のりではなかっただろうに——それを嬉しいと思う心はある。彼らの益になることを何ひとつしていないのにも関わらず、自分のために心を砕いてくれる存在が二人もいる、それを幸せなこと

サンプル - パロットアンドラダー

だと思える。しかし、ティオの胸の内を占めるのは戸惑いだった。

両親とは、たまに手紙をやりとりするくらいで、財団を介して定期的に状況報告を行うほかはろくに話もしてこなかったのだ。一人で家を飛び出してから三年も経ってしまった手前、今更どんな顔をして会えばいいのか分からない。会うことで自分にどんな影響がもたらされるか分からない。『分からない』は怖い。だから、今は会えない、とティオは結論を出している。出来ることなら彼らに会いたいし、謝りたい。そうやって安心したいし、してもらいたい。その感情を理解できるようになった今だからこそ、心からそう思えるのだが。

――〝彼〟は、想像しただろうか。あの日の少女がこんなふうに捻くれてしまうことを、予測できていただろうか。別れ際に『安心しろ』と言ってくれたのは、摩耗しきった少女の未来にも希望を信じたからではなかったか――少なくとも、保険や気休めの類ではなかったはずだ――ティオの顔色は曇ってしまった。今更考えても仕方がない。〝彼〟はもういない。

「……わたしはどうしたらいいんでしょうか」

ティオが問うた相手はヨナだった。他に誰もいなかった。

サンプル - パロットアンドラダー

「いや、知らないけど。なんでボクに訊くわけ」
返事は一字一句ティオの予想通りだった。そのおかげで平静を取り戻し、ティオは椅子に深く掛け直した。
「本当はロイドさんに相談しようと思ったんです」
「さっき言えばよかったじゃん」
それは分かりきっている。ティオは目を伏せた。
「……ロイドさん、先ほどキャビンで見かけたときに、エリィさんと後で話そうって約束をしていました。だから、あまり引き止めるのも悪いかと……」
「ああ……やっぱりあの二人ってそうなんだ」
ヨナの何気ない一言は、同時に端的な一撃でもあった。成程確かに、いわゆる『決戦前夜』のシチュエーションにして、事もあろうに月の綺麗な夜である。まるで誰かの希望であつらえたかのように完璧な今夜、今までもどかしい距離感に留まってきたロイドとエリィが二人きりで話をしようというのだから、つまりはそういうことに決まっている。遅かれ早かれ彼らはそうなるだろう、とティオも随分前から予想はしていたし、その展開を見守ってきたうちの一人としては、むしろ遅すぎるくらいだとも

サンプル - パロットアンドラダー

思った。しかし、自分で思いつくのと他人から突きつけられるのとでは、受ける衝撃が桁違いだ。

押し黙ってしまったティオを見やり、ヨナは大いに呆れた様子で言った。

「不戦敗とかダッサ」

「うるさいです。人のこと言えた立場ですか」

ティオは畳んだままの便箋から目を上げなかった。ヨナはなんとも言えない微妙な表情になって唇を歪めた。

「そりゃ、ボクに言えたことじゃないんだろうけどさぁ……」

「……そもそも、あなたには関係のないことでしたね。余計な時間を取らせました」

突き放すようにそう言って、ティオは手紙を封筒にしまった。ヨナは複雑そうな表情のまま、ゆっくりと踵を返した。

「じゃ、寝てくるから」

「ヨナ」

まだ何かあるのかよ、とヨナは声にこそ出さなかったが、心底面倒くさそうな様子で足を止めた。

サンプル - パロットアンドラダー

「何」
「もし、わたしがレミフェリアへ帰ることになったら、どうしますか？」
「別にどうもしないけど」ヨナは質問の意図を考えながら答えた。「引き止めてほしいとか？」
「そういうわけじゃありません。言われなくてもクロスベルに留まるつもりです」
「だったら好きにすればいいじゃん」
「……それはワガママではないでしょうか」
「今だって誰かに許可してもらってここにいるわけじゃないだろ」
まだ意図が読み切れない様子で、ヨナは頭の後ろに手を組んだ。訝しげなその目に向かってティオはまっすぐな視線を投げかける。
「ヨナは、わたしがクロスベルに残ったら嬉しいですか？」
この問いにヨナは体を斜めにずらした。
「んー……まあ、一応？　いてくれないと困るし……って、今のは別に変な意味とかではなく！」
「はあ、急にロイドさんみたいなことを言い出しましたね……少々意外です」

サンプル - パロットアンドラダー

「だ、だから違うって。ほら、もしアンタがいなくなったりしたら、ロバーツのオッサンが今までの倍はボクに構うようになるってことだろ。そんなの絶対無理だぜ、ストレスでハゲちまう」
「ストレスと言うなら、あなたより主任がハゲるほうが先だと思いますが……」
ティオはじっとりした目つきでヨナを見据えた。それから瞬きを一度すると、おかしそうに、くすりと笑った。応じるようにヨナもニヤリと笑みを見せた。
「ま、アンタはちゃんと必要とされてるよ。財団にも、支援課にも」
「また、らしくないことを言いますね。明日あたり雪が降りそうです」
「なんだよ。励ましてやったのに」
ヨナはそうぼやいて拗ねてしまった。ティオはからかうような目をするのをやめ、今は横を向いてしまっているヨナに向かって素直に微笑んだ。
「ありがとうございます、気を遣ってくれて」
「別にぃ？」
おもむろに振り返ったヨナは、ティオのうつむきかけた顔を覗いてぎょっとした。ティオが大きな目に涙をいっぱいに溜めて、かすかに肩を震わせていたからだ。

サンプル - パロットアンドラダー

「えっ、ちょ……えっ……？」

――彼ったら、『俺たちにはエリィが必要だ』なんて急に変なことを言い出すからちょっと焦っちゃったわよ。本当に油断ならないというか……。

ティオの脳裏でその声が反響していた。エリィの声だった。澄み渡って心地よく、このときはやや照れていて、少し前にからかわれたせいで拗ねたような揺らぎも含んでいた、彼女の声だった。思い出したのはその声だけではなかった。今のティオがこれほど胸をつまらせている理由も一緒に掘り起こしてしまった。

結局――わたしは選ばれなかったのだ、と。

「お、おい、どうしたんだよ……」

ティオは首を小さく横に振った。

「すみません……」

「いや、謝られても逆に困るっつーか……」

ティオはまた首を横に振った。それきり黙りこくってしまった少女の洟をすする音が、静まり返った艦橋に響きわたった。フロントガラス越しの月はその姿を照らし出さないように薄い雲を纏って光を抑えていたが、それでもついに膝へ落ちた雫はキラ

サンプル - パロットアンドラダー

キラ輝いた。
ヨナは、ティオの傍らに立ったまま、しばらく彼女の後頭部へ向かって口を開いたり閉じたり、手を上げたり下げたりしていたが、とうとう諦めてポケットへ手を突っ込んだ。
「……そんなに泣くほどアイツのこと好きだったのかよ……」
ため息まじりに呟く声からティオは感情を拾い損ねた。ヨナの言ったことに対しては、自分の頭の中でさえ否定も肯定もすることができなかった。ただ、声を押し殺して泣く自分をどこかで俯瞰するような感覚に陥りながら、彼の目にはそう見えるのだな、と、他人事のように考えた。